

## 小書とは何か

能では作品の演じ方が細かく定められているが、通常とは異なる演じ方が行われる場合に「小書」が付く。

通常とは異なる演じ方の多くは名称が定められており、能の曲名の下にその名称を小さな字で書くことから「小書」と言う。

室町時代の能では様々な演じ方が行われていたが、江戸時代に入ると演じ方が固定されていき、それに伴って「小書」が生まれていった。

いろいろな「小書」を持つ作品がある一方で、「小書」が少ない作品や「小書」がまったくない作品もある。

シテ方の流派によって「小書」には違いがある。各流に同じ「小書」がある、同じ演じ方だが流派によって「小書」の呼称が違う、特定の流派にだけ「小書」があるなどいろいろなケースがある。

通常の演じ方にするか「小書」付きにするかは役者がいろいろな条件から考えて決める。「小書」付きで演じる方が普通になってしまった作品もある。

## 小書のいろいろ

### 【台本に関する小書】

小書が付くことによつて台本（詞章）の一部が変わる。例えば（橋弁慶）の前場は五条大橋で千人斬をしてい  
る者がいると聞いた弁慶が五条大橋へ向かうという内容だが、「笛之巻」の小書が付くと、牛若の母の常磐が

牛若の千人斬を諫めて笛を渡すという内容になる。

### 【登場人物に関する小書】

小書が付くことによつて登場人物が変わる。喜多流の（絵馬）の後場はシテ男神とツレ天女二人が登場するが、「女体」の小書が付くとシテが女神となり、ツレが男神と天女一人になる。（老松）で「紅梅殿」の小書が付くと後場に通常は登場しないツレ紅梅殿が登場する。（紅葉狩）で「鬼揃」の小書が付くと、後場にシテの鬼女のほかにツレとして多くの鬼女が登場する。

### 【扮装に関する小書】

小書が付くことによつて面・装束などの扮装が変わる。それに伴つて演技にも細かな変化が生じることが多い。（小鍛冶）に「白頭」の小書が付くと、通常は童子姿の前シテが小尉姿となり、通常は赤頭の後シテの頭髪が白頭となり、面も小飛出から大飛出・牙飛出などに変わる。

### 【作り物に関する小書】

小書が付くことによつて作り物の有無が変わる。（半部）で「立花供養」の小書が付くと舞台の正先に立花が置かれる。（猩々）で「置壺」の小書が付くと大きな酒壺の作り物が出され、柄杓で酒を汲んで飲む演技が行われる。

### 【登退場に関する小書】

小書が付くことによつて登場や退場のしかたが変わる。（清経）で「恋之音取」の小書が付くとシテは笛の演奏に合わせながら橋掛りをゆつくりと進んで登場する。（土蜘蛛）で「入違之伝」の小書が付くと、前シテの退場とワキの登場が同時となり、橋掛りですれ違いざまに前シテはワキに向かつて糸を投げ掛ける。

### 【舞に関する小書】

小書が付くことによつて、舞の有無、舞の種類、舞の長さ、舞の所作などが変わる。(花筐)で「舞入」の小書が付くと、通常はイロエの部分の中之舞になる。(葛城)で「大和舞」の小書が付くと、序之舞が神楽または特殊な序之舞となる。(杜若)で「恋之舞」の小書が付くと、序之舞の途中で水面に我が姿を映して昔を懐かしむ所作が入り、囃子の演奏も変化する。

#### 【囃子に関する小書】

小書が付くことによつて、囃子の演奏の一部が変わる。(花筐)で「大返」の小書が付くと、クルイの初句「おそろしや」の後に特殊な囃子の演奏が入る。金剛流の(敦盛)で「青葉之会釈」の小書が付くと、ワキの着キゼリフの後に笛のアシライが吹かれ、それを聞いてワキが「あら不思議や、あの上野にあたつて笛の音が聞こえ候」と言う。

※このほかにも、所作が変わる小書、ワキやアイが変わる小書、曲のあちらこちらが変わる小書などがある。

### 熊野の小書

#### 【読次之伝】

よみつぎのでん。第五段「文」の前の「見るまでもなしそれにて高らかに読み候へ」というワキの詞章が「さらばもろとも読み候べし」となり、ワキが文を受け取って床に座るとシテも隣に座る。ワキが「甘泉殿の春の夜の夢」と読み出し、「同じ世にだに添ひ給はずは」からはシテが謡う(少し前の「ただ然るべくは宣きやうに申し」などからの場合もある)。シテが謡う時も文はワキが持ったままで、文を少し傾けてシテに見せるようにする。観世流のみの小書で、金春流・金剛流・喜多流はこれが通常の演出であり、ワキが「甘泉殿の春の夜の夢」と読み出して、次の「驪山宮の秋の夜の月」からシテ・ワキの連吟となり、和歌の「老いぬれば」の句をシテだけが謡い、

「さらぬ別れの」から再び連吟となる。

【村雨留】

むらさめどめ。中之舞の最中に雨が降ってきたという態で、シテが空を見上げながら「なうなう俄かに村雨のして花の散り候はいかに」と謡って舞が終る。観世流と金剛流にある小書だが、金剛流は「花之留」と呼ぶ。

【墨次之伝】

すみつぎのでん。第十段でシテが「降るは涙か桜花、散るを惜しまぬ人やある」と謡った後に、短冊を取り出して扇の要を筆先に見立てて和歌を書き付けるが、通常の演じ方では和歌を一行に書くところを、この小書が付くと二行に分けて書く形になり、一行目から二行目に移るところで再び筆に墨をふくませる演技を行う。囃子の演奏が通常とはやや異なつたものとなる。観世流のみの小書である。

【膝行】

しつこう。第十段で短冊に和歌を記したシテはその短冊をワキに渡すが、その際に少し手前で膝を付き、膝を付いたままで前に進んでワキに短冊を渡す。貴人に物を捧げる時の作法を取り入れたものと言われる。通常は和歌の上の句をワキが読んで下の句をシテが読むが、この小書では全部をワキが読む。「墨次之伝」の小書が付くと「膝行」の小書も付くことになっている。